様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６７１

研究課題名（和文）『切韻』系韻書総合データベースの構築

研究課題名（英文）Construction of a Comprehensive Database of the Series of Rhyme Dictionaries "Qieyun".

研究代表者
鈴木　慎吾（SUZUKI, Shingo）

大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・講師

研究者番号：２０５１３３６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　中国語音韻史の中心資料である隋唐期の韻書、いわゆる『切韻』系韻書について、現存する残巻資料のすべてのテキストをデータ化し、検索及び閲覧可能なウェブシステムを構築した。またこれを、すでにウェブ上で公開済の中古韻図（『Web韻図』）および『切韻』佚文検索システムと統合し、合わせて『切韻』系韻書総合データベースとして公開した。これにより、ウェブ上において中古音資料をテキスト、音韻の両面から扱うことが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　『切韻』は中国語音韻史研究に関してのみならず、国語音韻史の立場からもきわめて重要な基本資料であり、日中両国において盛んに研究がなされてきた。
　『切韻』残巻研究は、佚文研究と並行して行われることが望ましく、これら両面から研究を進め、またその成果を連携させた形でウェブ上に公開し研究の共通基盤とすることには大きな社会的意義があると言えよう。またこの『切韻』残巻に特化した電子化事業は、古典テキストの電子化が盛んな中国でもまだ行われていないようであり、先手を打った着手が望まれていたところでもあった。

研究成果の概要（英文）：We have constructed a web system to search and view all the extant texts of the Sui-Tang period rhyme dictionaries, so-called the series of the "Qieyun" rhyme dictionaries, which are the main source of Chinese phonological history. In addition, we integrated this with the rhyme table of the Middle Chinese ("Web韻図") and the "Qieyun" lost-texts search system and released it as a comprehensive database of the "Qieyun" series rhyme dictionaries. This makes it possible to handle the materials of the Middle Chinese phonology on the web, in terms of both text and phonology.

研究分野：中国語学

キーワード：切韻　韻書　データベース　中国語学　音韻史

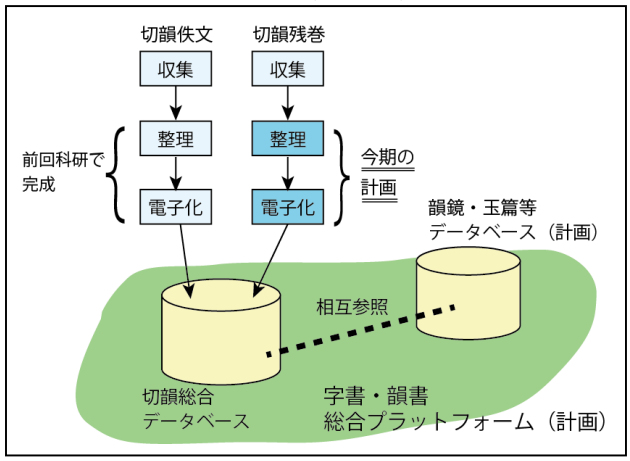
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国音韻史研究の中心資料である隋・陸法言撰『切韻』は、原本はつとに失われ、王仁昫による増訂本『刊謬補缺切韻』の一本が完本として伝わるほかは、唐五代の各種増訂本が残巻として伝わるのみである。これらの残巻の多くは、いわゆる敦煌・吐魯番文献として発見されたものであり、これまでに多くの研究者によって整理、研究がなされてきた。上田正『切韻残巻諸本補正』（1973）はそれらの研究を網羅的に集めた、当時の研究段階における集大成と言える。申請者はこれまで、上田氏のこの研究を基礎とし、特に上田氏の段階でまだ発見されていなかった諸残巻についてテキストの釈文とそれらに対する分析を行ってきた。これにより、すでに発見されている残巻資料のテキスト整理はほぼ完了したと言ってよい（鈴木 2004，2009，2010）。

ところで、『切韻』のテキスト研究は、残巻そのものの研究のほか、諸本に引用された佚文に関する研究があり、両方面からの研究が必要である。申請者はこの直前の 4 年間、科研研究としてこの佚文のデータ化作業に取り組んできた。これは 2015 年度を最終年度として作業を行い、この完成により、残巻資料だけでは知られないさまざまな『切韻』の状況を多角的に調査する基盤が構築されることとなった（中間報告は鈴木 2014）。今回の申請により構築する残巻データは、この佚文データと統合することにより、今後の『切韻』研究の新しい基盤を目指すものである。



（佚文データベース：http://suzukish.s252.xrea.com/search/qieyun_yiwen/search_top.php）

さて、『切韻』は大小さまざまな残巻として伝わっているため、網羅的に調査するにはこれまで大変な手間が掛かってきた。残巻を一覧、対照できる資料としては劉復等『十韻彙編』（1936）があるが、出版時期が古く、収録残巻が限られているという難点があった。その後、今日までの間にテキストの整理は進み、電子化の準備はほぼ整っていると言える。本研究が企画する残巻の電子化作業は、いわば現代版『十韻彙編』の構築と言うべきもので、さらに佚文データをも同時に参照できる『切韻』総合データベースの構築を目指す。なお、これは将来構築されるべき「中国古典字書・韻書総合プラットフォーム」に発展させることを考えている（上図）。

２．研究の目的

今回の研究は『切韻』のテキスト研究のうち、特に残巻資料の電子化に重点を置いたものである。具体的な項目と目標は以下のとおりである。

(1) 原資料の調査、確定

『切韻』残巻のテキストは上田正『切韻残巻諸本補正』によって整理されているが、上田氏の記述には誤りも少なくない。本研究では上田氏の研究をもとに原巻写真を再調査し、また上田氏以降に発見された残巻も網羅的に対象とする。

(2) データフォーマットの検討

残巻テキストをデータ化する際のフォーマットを検討する。当初は MySQL を利用する予定で、すでにサンプルデータは構築しているが、さらに検討を加える。

(3) 『切韻』残巻データ入力

上田氏の研究をベースに、原巻による確認を行いつつテキストをデータ化する。かなりの量があるが、3 年間をかけて完成を目指す。

(4) 検索システムの構築

残巻テキストを任意の形式で取り出すことのできる検索システムを構築する。これはウェブ上に公開し、『切韻』の文献学的研究における基本インフラとすることを目指す。

(5) テキストの検討

完成したデータベースを元に、残巻のテキストを形式と内容の面から検討を行い、特に性格のいまだに分かっていない残巻に関してその性格を明らかにする。

(番外) 佚文資料との比較検討

次の段階は、構築された残巻データベースを佚文テキストと比較し検討することであるが、これは作業量が多いため、次回の研究での継続課題とする。ただし、今回の研究で(4)までが完成していれば、容易に着手することができるはずである。

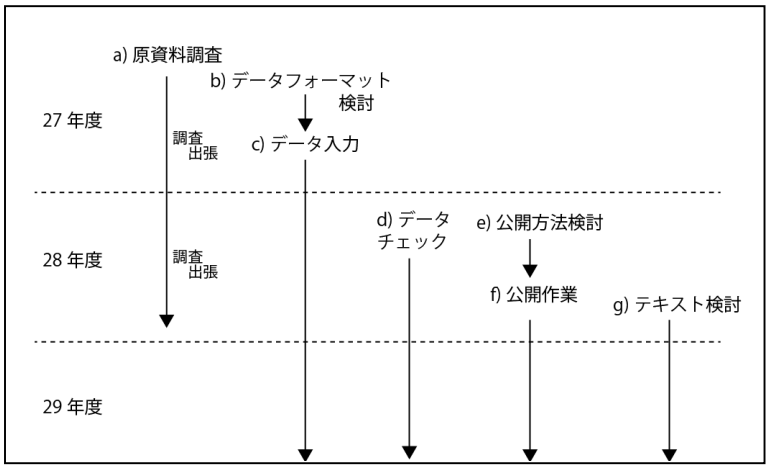
３．研究の方法

(1) 2016 年度

① 原資料の検討（工程 a）

『切韻』のテキストは上田正『切韻残巻諸本補正』によってすでに整理がされているが、転写の誤りも少なくない。まずは上田氏の研究をもとに、残巻資料の原物調査を行い、作業の基礎資料を収集する。資料の一覧はすでに鈴木 2012 に整理してある。海外の文献が多いが、必要に応

じて調査出張を行う。影印本で足りる場合はこれを利用する。ただし、これまでの準備段階において鮮明な写真を収集している文献も多い。



② データフォーマットの検討（工程 b）

残巻テキストをデータ化する際のフォーマットを検討する。データ化形式は MySQL の予定で、すでにサンプルデータは構築しているが、さらに検討を加える。

③ データの入力（工程 c）

策定したデータフォーマットに従って残巻データを入力する。ここは人力が必要なので、学生作業者のチーム（主に中国語学を専攻する大学院生およびオーバードクター計 7-8 名程度で構成）に依頼する。入力したデータは全て、別の作業者によってチェックを行い、最終的には申請者（鈴木）がチェックする（工程 d)。

(2) 2017 年度

「③ データの入力」は前年度から継続して作業を行う。また、「a) 原資料の検討、確定」は 2016 年度中には完成しない見込みなので、継続調査を行い 2017 年度中の完成を目指す。2017 年度に新たに加わる項目は以下の通り。

④ 入力データのチェック（工程 d）

入力したデータを原資料によってチェックする。なお、佚文データ構築（前回科研）の際の経験から、この工程が最も労力を要することが分かっているので、十分な時間を確保する。

⑤ 公開方法の検討（工程 e）

残巻データを任意の形式で取り出すことのできるデータベース検索システムの設計を行う。システムはブラウザベースのウェブアプリケーション（php）を予定している。これについては、過去に行ったアプリケーション開発の知識と技術を応用する（鈴木 2010a, 2010c)。すでに公開している「Web 韻図」および「切韻佚文データベース」と連携させることも検討している。

⑥ 公開作業（工程 f）

⑤で検討した公開方法に基づき、公開用のアプリケーションを開発し、ウェブ上に設置、公開する。構築したデータについて、加工が必要であればここで適宜加工を行う。

⑦ 巻テキスト検討（工程 g）

完成したデータベースを元に、残巻テキストについて体例と内容について具体的に検討を行い、特に性格が十分に分かっていない残巻についてその性格を明らかにする。

(3) 2018 年度

「③ データの入力」「④ 入力データのチェック」は前年度から継続して作業を行い、完成を目指す。2018 年度に新たに加わる項目は申請時点で設定していないが、完成しつつあるデータを元に「⑦ 残巻テキスト検討」を行うことで、現在想定されていないデータ構築上の問題点を洗い出し、データベースを完成させる予定である。

４．研究成果

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①『切韻』諸本テキスト一覧システムの構築について、じんもんこん 2018 論文集、pp. 117-122、2018 年

②中古漢語の韻母体系について—唇音性の有無による喉音韻尾二分説を起点に、中国語学、pp. 62-75、2018 年

〔学会発表〕（計 5 件）

①『篇韻データベース』の構築について、漢デジ 2016：平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立、北海道大学、2016 年 8 月 26 日

②『切韻』の韻序に関する試論、漢デジ 2017、北海道大学、2017 年 8 月 25 日

③中古音韻尾の円唇・非円唇対立について、日本中国語学会第 67 回全国大会、中央大学、2017 年 11 月 12 日

④北京語韻母体系の再考、日本中国語学会第 68 回全国大会、神戸市外国語大学、2018 年 11 月 4 日

⑤中古期の韻書、第 64 回国際東方学者会議 SYMPOSIUM II 「中国中古期・日本の古辞書研究の現在」、日本教育会館、2019 年 5 月 18 日

〔その他〕

データベース公開ウェブサイト

○篇韻データベース

http://suzukish.s252.xrea.com/search/

①切韻佚文検索

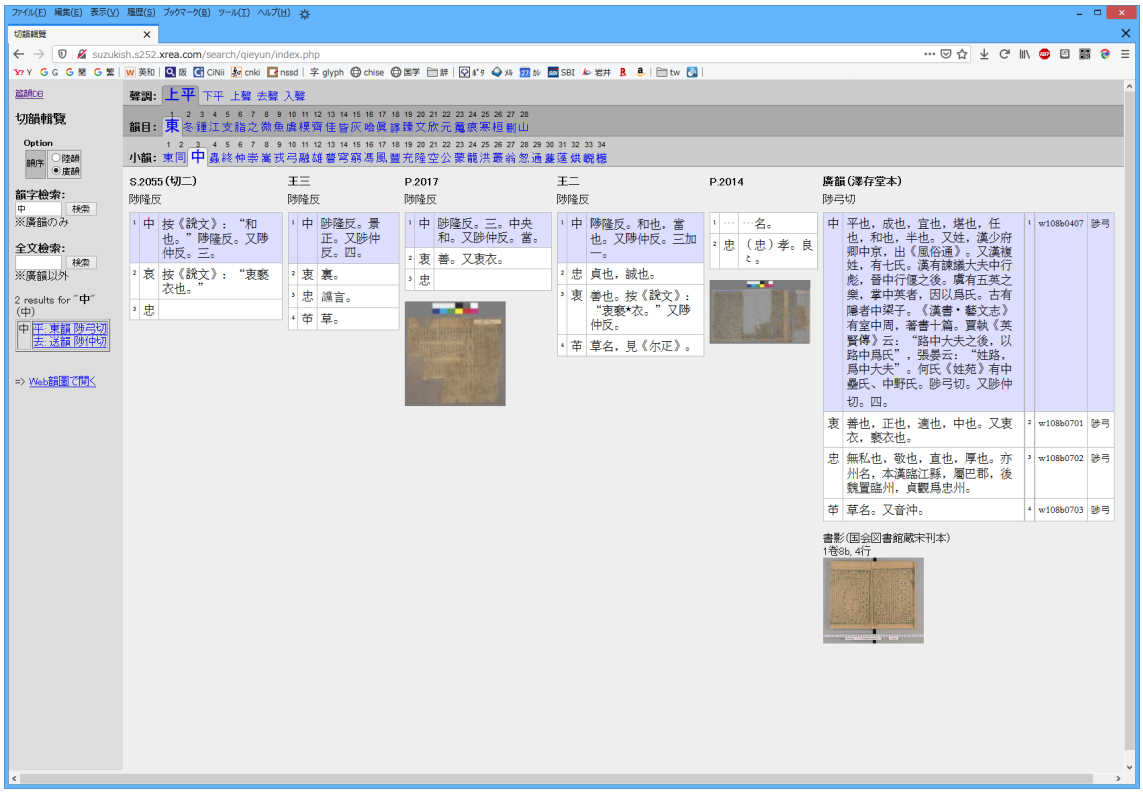
http://suzukish.s252.xrea.com/search/qieyun_yiwen/search_top.php

②『切韻』諸本輯覽

http://suzukish.s252.xrea.com/search/qieyun/index.php

③Web 韻図

http://suzukish.s252.xrea.com/search/inkyo/index.htm



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木慎吾	４．巻 2018
２．論文標題 『切韻』諸本テキスト一覧システムの構築について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 じんもんこん2018論文集	６．最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木慎吾	４．巻 265
２．論文標題 中古漢語の韻母体系について―唇音性の有無による喉音韻尾二分説を起点に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国語学	６．最初と最後の頁 62-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 『切韻』の韻序に関する試論　―遠藤説、平山説を基礎として―
３．学会等名 漢デジ2017
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 中古音韻尾の円唇・非円唇対立について
３．学会等名 日本中国語学会第67回全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 『篇韻データベース』の構築について
３．学会等名 漢デジ2016：平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立
４．発表年 2016年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 北京語韻母体系の再考
３．学会等名 日本中国語学会第68回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木慎吾
２．発表標題 中古期の韻書（SYMPOSIUM II 「中国中古期・日本の古辞書研究の現在」）
３．学会等名 第64回国際東方学者会議（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

篇韻データベース http://suzukish.s252.xrea.com/search/ 切韻佚文検索 http://suzukish.s252.xrea.com/search/qieyun_yiwen/search_top.php 『切韻』諸本輯覧 http://suzukish.s252.xrea.com/search/qieyun/index.php Web韻図 http://suzukish.s252.xrea.com/search/inkyo/index.htm

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	矢放　昭文 (YAHANASHI Akifumi) (20140973)	大阪大学・言語文化研究科・招へい研究員 (14401)	